

有角石斧の新例と若干の考察

宮城 孝之

1. はじめに

関東地方の弥生文化が、より顕著に展開していくのは弥生時代中期後半に至ってからである。土器にみられる伝統的な地域性の崩壊にともなう新たな再編の動きや、大陸系磨製石器の急激な普及、集落の増加と規模の拡大は、新たな展開の画期を明瞭に示すものであろう。

有角石斧は、この中期後半の宮ノ台期以降確実に存在し、かつ広範囲に分布するのではないかとみられるが、今のところ共伴する土器によって明確に時期を決定し得た出土例は数少ない。

中谷治宇二郎が本格的に有角石斧を取り上げ論究(註1)して以来すでに半世紀以上経過しているが、この間の出土報告は極めて乏しい。近年に

わかに発掘調査による出土報告例が増えつつあるが、依然、個体数は60例前後を数える程度と推測される。

ここに紹介する有角石斧の新例は、発掘調査によったものではなく、出土状況や共伴遺物の有無等詳らかにし得ないのが残念であるが、有角石斧研究の助けとなれば幸いである。

以下出土地及び有角石斧について報告し、若干の考察を加えたい。

2. 出土地及び遺物

本例は、当センター調査研究員土屋潤一郎氏所蔵の資料である。前号で、市原市草刈遺跡E区及びF区の有角石斧を紹介したが、F区において有



第1図 出土位置及び周辺遺跡 (1 : 25,000)
1. 出土地、森ノ下遺跡 2. 妙見台遺跡 3. 先随遺跡
4. 宿遺跡 5. 内野遺跡 6. 大内台遺跡

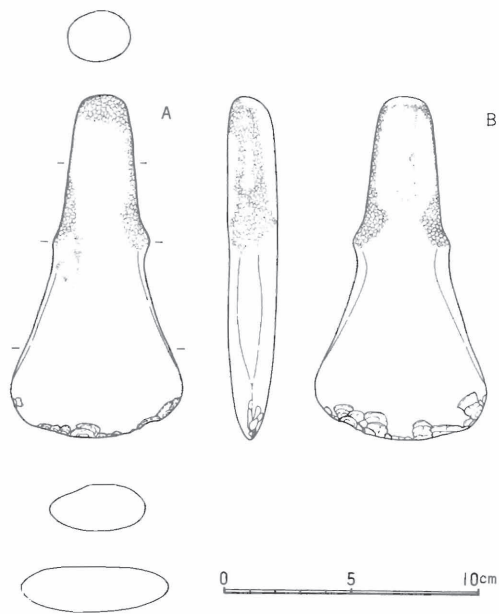
角石斧が出土した際、筆者とともに調査にあっていた土屋氏から所蔵する有角石斧について話を伺い、今回氏の勧めで紹介させていただくこととなった。

土屋氏によるとこの有角石斧は千葉県香取郡多古町南玉造字森ノ下から出土したものだという。1982年度の多古町工業団地予定地内の調査中、一緒に仕事にあっていた調査補助員から譲り受けたもので、畑を耕作中に発見したという。有角石斧のほかに同時に採取された遺物はなく、単独で採取されたものである。

第1図に出土地及び周辺遺跡を示した。有角石斧が出土した多古町南玉造字森ノ下は『千葉県多古町埋蔵文化財分布地図』（註2）によると森ノ下遺跡として記載されており、土師器散布地となっている。現況は畑地である。

地形的には、太平洋にそそぐ栗山川とその支谷とに三方を囲まれた台地の東端に位置している。標高は30~40mで、台地はさらに小支谷によって分割され、小台地を形成してそれぞれに縄文時代以降の遺跡が存在している。森ノ下遺跡の一部は学校建設の際に削平されたとみられるが、遺跡の中央及び眼下の水田にのぞむ斜面は畑地として残されている。

第2図が出土した有角石斧である。まったく欠損部のない完形品である。全長13.5cm、刃部両端間の長さ6.8cm、角部間の長さ3.8cm、柄部2.6cm、最大厚2.0cmを測るやや小型の有角石斧である。形態は撥形を呈し、刃部の開きが大きく柄部にむかってなめらかな曲線をもって巾をせばめてゆく。角部突出は小さく他の例に比べ柄部に偏っている。両刃で、刃部中央の突出がほとんどなくゆるい弧を描く。A・B面ともに刃の縁辺に細かい剥離が認められ、ほぼ全面にわたる。1、2回の刃部加撃によってできた剥離とは思われない。複数回の加撃、それも軽度の加撃によって生じた剥離と考えられる。柄部の断面形はほぼ円形を呈する。両角部から柄部端にかけての側縁に、細かい敲打痕が認められるが、それ以外はよく研磨されている。この敲打痕は、有角石斧を製作する過程で整形のため行われた敲打が、最終の研磨の際あえて研磨されずに残されたものと考えられる。石材は硬質砂岩である（註3）。



第2図 有角石斧実測図(1/3)

3. 千葉県下の出土例

千葉県下の有角石斧は、管見にふれた限りでは先頃報告された佐倉市大崎台遺跡出土例をふくめ20例出土している。表1に県下の出土例をまとめてみたが、この内の11例が発掘調査によって出土したものである。

特に市原市では9例と多く、8例は大規模な造成工事に先立つ調査によるものである。県外の諸例と比較してもこれほど集中的に出土している地域は今のところめずらしい（註4）。

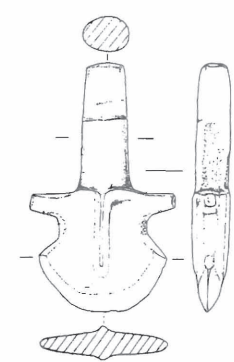
11例の調査による出土例中住居址内出土は9例、方形周溝墓周溝内1例、古墳周溝内1例となっており、住居址内出土例が多い点に注意しておきたい。

時期的には、宮ノ台期と判断されるもの7例、久ヶ原及び久ヶ原併行期と考えられるもの2例である。南向原古墳出土例は報告者が久ヶ原期と断定しているが、周辺に久ヶ原期の住居址が存在したとはいえ周溝内出土であって久ヶ原期とするには若干の疑問が残る。また、草刈遺跡（E区）出土例は古墳時代前期住居址覆土からの出土である。有角石斧の時期を当該期とするには時期的にも、また時代的にも大いに疑問される場所である。

以上11例の他は今回の報告例と同様に単独で採取され、時期その他は不明である。ただ特殊な例

番号	遺跡名	所在地	時期	遺構	出土状況	遺存度	文 献
1	御林跡	市原市加茂	宮ノ台	第57号住	床面	角部欠損 最大長15.6cm	浅利幸一「千葉県市原市国分寺台出土の有角石斧」 『伊知波良』2 1979
2	御林跡	// 加茂	宮ノ台	第147号住	床面	刃部欠損 残存長13.0cm	同上
3	台	// 加茂	久ヶ原	第230号住	床面	刃部のみ 残存長 5.2cm	同上
4	紙圍原貝塚	// 根田	宮ノ台	第47号住	床面	柄部欠損 残存長 8.8cm	同上
5	南向原	// 郡本	久ヶ原?	1号墳周溝	覆土	柄部欠損 残存長 7.6cm	『南向原』上総国分寺台遺跡調査会 1975
6	草刈(E区)	// 草刈	五領?	149号住	覆土	柄部欠損 残存長13.0cm	榊原弘二他「市原市草刈遺跡出土の有角石斧について」 『研究連絡誌』12号 千葉県文化財センター 1985
7	草刈(F区)	// 草刈	宮ノ台	307号住	床面	柄部欠損 最大長 8.8cm	同上
8	草刈(F区)	// 草刈	宮ノ台	307号住	周溝上	完 形 残存長15.9cm	同上
9	菊間	// 菊間	宮ノ台	第2号周溝	覆土	刃部のみ 残存長 5.8cm	『市原市菊間遺跡』房総資料刊行会 1974
10	大崎台	佐倉市六崎	宮ノ台	第177号住	覆土?	刃部・柄部欠損 残存長10.4cm	『大崎台遺跡発掘調査報告』I 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985
11	関戸	成田市関戸	久ヶ原併行	045号住	床面	柄部欠損 残存長10.5cm	『成田新線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 II 千葉県文化財センター 1983
12		香取郡 千湯町湯木	不明	不明	不明	柄部欠損 残存長 9.3cm	麻生優「有角石斧の新資料」『貝塚』49号 1954
13		// 多古町	不明	不明	不明	完 形 最大長19.8cm	『房総風土記の丘だより』No.2(資料紹介) 1982
14		香取郡 大柴町堀籠	不明	不明	不明	完 形 最大長16.3cm	『北総の原始古代』図録第3集 成田山麓光館 1982
15	良文具塚	香取郡小見 川町良文	不明	不明	不明	刃部欠損 残存長12.5cm	清水潤三「有角石器の諸問題」 『考古学雑誌』40-2 1954
16	古作貝塚	船橋市古作	不明	不明	不明	完 形 最大長18.5cm	中谷治宇二郎「東大人類学倉庫より発見されし二個の 石器に就て」『人類学雑誌』39-7・8・9 1923
17		旭市西足洗	不明	不明	不明	完 形 最大長17.5cm	柴田常恵「下総国海上郡足洗村発見の奇形石器」 『人類学雑誌』27-5 1911
18		印旛郡印旛 村花輪台	不明	不明	不明	刃部欠損	酒詰伸男「千葉県印旛郡地方遺跡概説」 『人類学雑誌』54-8 1939
19		千葉市加曾 利貝塚付近	不明	不明	不明	刃部欠損 残存長 8.5cm	16の文献と同じ

表1 千葉県内の有角石斧出土地地名表



第3図

東京都北区出土例 (1/6)

として掲げた東京都北区浮間町出土例は、多古町例に次ぐ最大長19.6cmを測る完形品だが、柄部に赤色顔料(本文では赤色塗料)の付着があるという(註6)。

2例とはいえ、柄部に赤色顔料が付着している点は着柄の有無や用途を考える上で十分に考慮されるべきであろう。

として第5図13の多古町出土例は基部と刃部にかけて、赤色顔料の付着が認められるという(註5)。本例は最大長19.8cmを測り、県外例をふくめ完存するものの中では最大である。刃部中央の突出が著しい極めて特徴的な形態である。第3図に参考

として掲げた東京都北区

浮間町出土例は、多古町例に次ぐ最大長19.6cmを測る完形品だが、柄部に赤色顔料(本文では赤色塗料)の付着があるという(註6)。

2例とはいえ、柄部に赤色顔料が付着している点は着柄の有無や用途を考える上で十分に考慮されるべきであろう。



第4図 出土分布図



第5図 千葉県内のおもな有角石斧 (1~8 1/6, 9~13 1/4)
 ※ 個体番号は表1の個体番号に同じ

4. 時期と分類

千葉県下の資料を見る限りでは、宮ノ台期から久ヶ原期にかけてはその存在を追うことができるようだ。新田栄治が「有角石斧の再検討」(註7)で述べているように「東日本の実用のいわゆる大

陸系磨製石斧類の消長と規を一にしている」ことはほぼまちがいがなからう。しかし、今のところその消長を明瞭にとらえるには依然資料不足であり、今後の調査を待たねばなるまい。

一方、形態の分類は中谷以来再三行われてきた。

おもな分類では清水潤三の6分類(註8)、新田の8分類(註9)があげられよう。両者ともに、新例を加え新たな分類を試みているが、分類基準がやや不明瞭であり、分類を基にした形態の変遷をそのまま肯首し得るとは考えられない。筆者は両者の分類作業を決して否定するものではないが、有角石斧の分類はもっとおおざっぱな分類でよいのではないかと考えている。なぜなら、有角石斧の個体差は、本来時期的な違いを直接示しているのではなく、その性格を反映したものと考えられるからである(註10)。

新田は分類をもとに「稜をもつものが後出的」であって「稜のないものから稜のあるものへという変遷がうかがえる」(註11)としているが、県内の資料をみる限りでは、それほど明確に変遷を追うものではないと考えられる。あえていうならば、草刈遺跡(F区)の2例をして、稜のあるものこそが古い段階ではないかと思われる(註12)。

5. 有角石斧の機能と用途

第5図に示した県下のおもな有角石斧を見ていただきたい。各個体には少なからず形態の相違が認められよう。形態の似通った例では1, 4, 12や10, 11などがあげられようか。しかし6, 8, 13のように刃部中央突出型の例が存在する。

各有角石斧の形態を比較した場合、最も大きな相違としてあげられる点は、左右に突き出た角などではなく、刃部の形態にこそあると考えられる。各有角石斧の刃部形態のきわだった相違、すなわち刃部形態の多様性こそが有角石器の機能と用途を現わしているにちがいない。

そこで同時期の大陸系磨製石器を取り上げ若干の比較を行ってみたい。

いわゆる大陸系磨製石器といわれる太型蛤刃石斧や挟入石斧、扁平片刃石斧は、生産加工用具としておおむね太型蛤刃石斧を伐採用とし、挟入石斧や扁平片刃石斧を加工用として機能的な分化をはたしている。いいかえれば、それぞれの用途に対し機能的な形態をもつと考えられるのである。従ってどの遺跡での出土例も個体の偏差はきわめて少なく定形化している。あくまで生産加工用具として一定の効果を発揮するには、必然的に刃部形態の厳密な規格化が図られねばならない。一般に刃部の形態は被加工物に対し破碎を目的としな

ざり力が一点に集中するような刃部中央の突出型はまずあり得ない。ゆるい弧及至直に近い刃部形態をとるものが普通である。

一方刃部をささえる身は刃部巾を大きく下まわる例はまったくと言ってよいほどに存在しない。なぜなら使用の際、刃部に加わる打撃に対しその衝撃を受け止め、自身の折損をふせぐよう刃部巾に近い十分な厚みと巾をもたねばならなかったからである。特に太型蛤刃石斧にあっては用途の上で石製品である以上、極めて分厚い形態となるのは当然のことであろう。

では有角石斧の形態はいかがなものであろうか。第5図を見ていただきたい。7, 8は同一住居址内出土であるが7はゆるい弧を描く刃部形態をとり、8は刃部中央が極端に突出する。また柄部巾及び両角部間の長さがほぼ同じであるにもかかわらず、7の刃部巾は8の1.4倍にも達する。およそ実用に供した場合同一の効果を期待することは不可能であろう。13は8よりもさらに突出が著しく県外にも例をみないほどである。

この様な刃部形態の多様性は、有角石斧を生産加工用具としてみた場合には特定用途に対する刃部の定形化が著しく未発達であることを示している。大陸系磨製石斧盛行期にこの様な定形化の後れた生産用具がはたして存在したであろうか。

筆者には有角石斧の形態が実用用途に即しているとは思われない。また、刃部巾に近い身を持っていない例が多く、強い刃部加撃に対し刃部両端の折損が極めて起りやすいと考えられる(註13)。ましてや強打を必要とする生産的用途を目的としてこの様な形態に至ったとは考えられない。

13のように柄部に赤色顔料の付着する例もあることから着柄されずに機能したことも十分に推察し得るのである。

不十分な検討ではあるが、以上の諸点から、有角石斧は実用性のないいわゆる儀器的利器の範ちゅうにふくめられるのではないかと思われる。とすれば有角石斧が銅剣銅鉾類を模したものとする森本の考えや、坪井清足の変形鉄剣形石剣からの転化とする説(註14)に対し、注意を払う必要があろう。

新田は稜をもつものが後出的だとする考えから銅剣銅鉾類や変形鉄剣形石剣などの稜と有角石斧の稜との結びつきを否定しているが、筆者には稜

をもつものが古い段階と思われる、逆に何らかの関連をもつと判断したい。

7, 8をみた場合、稜をもつというよりは二条の樋を表裏に持つといった方が正確であって銅剣銅鉾類の樋とも近似する。従って有角石斧がこれらを模したとする考えをあなたがち否定することはできない。

しかしこの様な出土例は少なく今後の検証に待たねばならないが、いずれにせよ大陸系磨製石器と規を一にして東日本の広範囲に普及したとみられることから、これらの石器類とまったく別個に発生し、普及したとは思えない。やはり西日本からの何らかの影響によって発生し、東日本型の儀器的利器として大陸系磨製石器類とともに普及したとみた方が妥当ではなからうか。

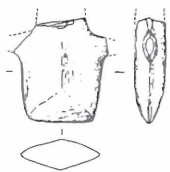
6. おわりに

筆者の考えを性急に述べてしまったが、諸々の点で資料の少なさを痛感する次第である。しかし、数が少ないとは言え、有角石斧が東日本における弥生時代中期後半の様相を示す特異な遺物であることにはかわりはない。

小稿では詳しくふれ得なかったが、県内出土例のうち住居址内出土例が多く特定住居での所有及び使用が行われたことも考えられる(註15)。これらの検証を行う上でも集落址の調査に伴う資料の増加を期待する次第である。

追記

脱稿後に四街道市山梨に所在する相ノ谷遺跡から、発掘調査によって1例出土していることを知った。5号住居址の覆土から出土しており、伴出



四街道市出土例 (1/6)

した土器から宮ノ台から久ヶ原にかかる時期と考えられる。柄部及び両角部を欠損している。厚さ3.2cmとやや厚味があり、中央に稜をもつ。刃部巾は8.5cmを測り先端の形状は直線的で県下の有角石斧の内このような直線的な刃部をもつ例はなく、第5図13の多古町出土例の刃部と対照的である。刃部形態の多様なあり方を示す1例である。この例をふくめると県下では21例出土していることになり、住居址出土例は10例を数える。

(『北総線』東京電力北総線遺跡調査会 1982)

註

- 1) 中谷治宇二郎「東大人類学倉庫より発見されし二個の石器に就て」『人類学雑誌』39-7・8・9 1923
- 2) 『千葉県多古町埋蔵文化財分布地図』多古町教育委員会 1981
- 3) 千葉大学近藤精造教授に鑑定していただいた。
- 4) 茨城県下霞ヶ浦周辺でも多数出土しているが発掘調査に伴う例は管見にふれた限り1点もない。今後この地域で調査例が増えれば、有角石斧の個体数も急激に増加するのではないかとみられる。
- 5) 『房総風土記の丘だより』No.2(資料紹介) 1982
- 6) 野口義磨「東京都北区浮間町出土の有角石斧」『考古学雑誌』51-3 1966
- 7) 新田栄治「有角石斧の再検討」『考古学雑誌』60-4 1975
- 8) 清水潤三「有角石器の諸問題」『考古学雑誌』40-2 1954
- 9) 註7に同じ
- 10) 出土例の増加によってはあるいは地域差としてとらえ得る可能性もあろう。
- 11) 註7に同じ
- 12) 新田は角部が隆帯状の例を古い段階として捉え、隆帯が発達し突出して角部となったと考えている。形態が短冊形で刃部が広がらない例をVII類として初期形態に分類している(新田 前掲)。しかし、あくまで型式学的な分類であって、時期の明確な資料をもって新田の分類を検証することは今のところできそうにない。
- 13) 刃部両端の折損例はほとんどないといってよい。その様な例では第4図10の大崎台遺跡例や茨城県新治郡出島村加茂出土例などがあげられようか。
- 14) 坪井清足「開けゆくクニ」『風土記日本』1958
- 15) 田中義昭は太型蛤刃石斧のような石器について個々の堅穴住居址が所有する石器ではなかったと推測しているが、これは有角石斧にこそ言えることではなからうか。(田中義昭「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』31-3 1984)

(第4班 成田空港事務所)